

S

遠くも近くもなく、ただ青くあるもの。

それはゆったりとした積雲と、客足が鈍り始めた飲食店からの煙が白を混ぜる、昼過ぎの空だ。

その空の下、人間の里近くに見慣れない建物がある。周囲が田畑草原ばかりの中で屋敷と呼べる大きさを持つその建物は、けれど土壁の塀と屋根付きの門までみればその通りだが、門から石畳を歩み正面に現われるのは邸宅ではない。

お堂だ。

背後には居住区として平屋建てがあるが、いずれも豪奢ではなく質素な作りのそれは寺に似ている。

事実、門の上、一枚板にはその名が記されていた。『命蓮寺』と。

S

本堂と居住区とを繋ぐ廊下を歩く女性がいる。

黒のロングスカートを静かに揺らす彼女は、ふと廊下の窓が開いていることに気付くと、そこに近寄った外を見る。

視界の先には土の地面と塀。土台の分だけ高くなった目線からは塀が低くあり、上には覗くようにして山々の稜線が緑としてある。耳をすませれば、

「……あらあら、元気なことだ」

喧騒がどこからか聞こえる。恐らくは本堂の前の庭部分で遊んでいる妖怪達だろうと思っていると、確かに聞き慣れた声が入ってきた。

『ふっふっふ。……君は鼠からチーズを盗むという意味を身を以て知るべきだね。肉体と言うべきかな?』

『いや違うあれは私ではなく雲山が勝手に! ほら、自分がやったと雲山も言っています!』

『……私には全身横に振って否定しているようにしか見えないんだがね。まあいい、どのみち私の宝の反応は君から出ているんだ、全身隈無く探そうか!』

『ひいっ! ちよっ、雲山も見てないで助け!』

「……どこにそのロッドを……ひやうっ!」

「らめえ、などと続き響いてくる声に、

「うふふっ」

思わず微笑んでしまう。ああ本当に元気ですね、と。色々とベクトルが違う気がしないでもないが、まさか御仏の御前で御イヤらしいことはするまい。

視線を清らかな空に戻す。

「……あら?」

すると先ほどまで見えていた稜線が無くなっていた。代わりとでもいうようにあるのは灰色がかった塊。厚く、深みのある雲だ。

空の色が透けないそれを見て思う。

……雨になりそうですね……。

恐らくは夕立程度の短いものだろうか。

自分が「感じる」限りでは夏の夕立に匹敵するはずだ。表にいる彼女達の中に入れるべきだろう。

「……それと、あれも用意しませんと」

吹き、窓を静かに閉め、彼女は歩みを再開した。

向かった先は、新しく建てられた古い造りの本堂だ。本堂は大きめの蔵程度の広さではない。事実、元は蔵だったものだ。それでも白蓮一人には余る。

程なくして清浄な場所独特の空気と、香の匂いに包

まれた。踏み歩く床の古い木材はたわむが、不思議と白蓮が歩いても軋む音すら出なかった。

ふと、お堂の広さが自身を含め二人分だけ狭くなっていることに気付いた。

一人、奥に鎮座している毘沙門天像の前で、正座している少女がいる。虎にも似た風貌、金髪黒髪の少女は瞑想しているかのようだったが、気配に気付いたのかそちらへと視線を動かした。

「——ああ、これは聖。どうかされましたか？」

「相変わらず真面目ですね、星は」

聖と呼ばれた女性、聖白蓮は星と呼んだ少女、寅丸星に歩み寄る。対する星はその場で立ち上がり聖に視線を合わせた。やや顔を赤らめ、

「真面目だなんてそんな……。私などより聖の方がよほど真面目でしょうに」

「いいえ、謙遜などしなくて良いことです。やはり貴方を毘沙門天様に紹介して正解でした」

にこやかに語る白蓮に、だが星は目尻を下げ、「正解、ですか。……私は、しかし聖が辛い目に遭っていた時でさえ——むぐっ?!」

「それは口にしないことと、前にも言いましたね？」

「……………はい」

「ん。ならよろしい」

そう言つて白蓮は、星の口に添えた右人差し指を放した。星は口端を歪め、苦笑と言うべき表情を作る。

「さて、星には頼み事があるんです。そろそろ雨が降りそうだから外の子達に戻るように伝えるのと、あとお風呂の準備を」

「? まだ日も明るいですが、風呂ですか?」

「ええ。きつとず濡れて寒いことでしょうから」

何を言っているのかと問いたくなって、星は口を開きかけた。しかし目の前の人物が誰なのかを思い出し、